

## 言語地理学における調査語彙の体系化について

長尾 勇

まえがき

最近の語彙研究では、語彙体系という考えが重視されはじめている。このことについて柴田武は次の如く述べている。

方言語彙の研究は方言研究として最も古いものであるが、最近の語彙研究は語彙体系という視点が入っている点が新しい。(中略) 語彙体系は結局のところ語と語との関係である。ソーラス的(1)な分類基準のもとに語を並べるだけでは語彙体系とはならない。ソーラス的(1)な分類基準は、どうしても恣意的になる。ただし、方言の比較対照をするのには便利である。しかし、方言の語彙体系としてどうしてもなくてはならないことは、その方言が内に持っている基準によって語を集め、それらの語相互の関係を研究すべきことである。(中略) 語彙という体系は、その方言に内在する論理によって立てるものだから、方言によって異なる内在論理によって立てられた語彙体系は、相互に比較対照できないはずのものである。(1)

柴田の言うソーラス的(1)な分類基準による方言調査が、従来の研究のどれを指しているのかは分からないが、さしずめ、日本各地にみられる

方言集などは、それに当たるであろう。

私は数年来、わが国における味覚用語について、その歴史の変遷と、俚語の地理的分布との関連を調べてきた。その一部は既に発表している(2)。その際、今後の課題として、味覚用語は体系的に調査しなければならぬ、しかも、その体系は日本各地において、まちまちであるかも知れないと考えた。もしも、この事を極めてきびしくとらえるならば、『日本語地図』(以下、『LAJ』と略記する)全六冊中の相当部分について再調査の必要があり、また、一枚毎の言語地図をマクロ的に考察することが不適切であるということにもなりかねない。従来の私の研究では、味覚用語の地理的分布に関する情報の大部分は『LAJ』から得ていた。その際、右のような危惧も感じないわけはなかった。たとえば、古来いわれてきた「五味」すなわち、酸苦甘辛鹹の中の「苦味」についての調査が省かれていること、「渋味」はどうか、「おいしい」はあるが「まずい」も調査が必要ではなかったかなど。

本稿では、今後さらに味覚用語の調査を進めるに当たり、体系的語彙研究ということを今一度整理するとともに、味覚用語における問題を考察してみる。

戦前における俚語収集では、単一の動物・植物・器具・遊戯等の呼び名を集めることが多かった。例えば、めだか・蟻地獄・すみれ・いたどり・桑の実・自在かぎ（いろいろの上につるして、思う高さに、なべ・かまをかけるようにつくった道具）・竹馬・お手玉など。中でも「めだか（目高）」に関しては、辛川十歩の『目高考』が、昭和十三年六月に発行され、初版には、日本全国から採集した「めだか」の俚語二一五九種が収められていた。辛川はその後採集を続け、昭和四一年には三〇六九種を発表、亡くなる昭和五三年二月までに、実に四六八〇種を採集した。辛川の死後、昭和五五年二月、柴田武の解説を添えた『メダカの方言―五〇〇〇の変種とその分布―』が未央社から出版された。おそらく「めだか」は、わが国における俚語量の最も多いものと考えてよいであろう。

ところで、この膨大な目高俚語集に添えられた精細な解説の中で、柴田は次のような指摘をしている。

辛川は、調査項目にメダカ類似の魚の名をも尋ねて、メダカ方言がメダカ以外のものをさしているおそれをチェックする用意をしているが、なお、メダカ以外のものをメダカ方言として報告していることがあるかもしれない。

これは、調査者辛川の調査法にも問題があったかも知れないが、被調査者それぞれの属する地域社会の言語体系の相異ということも考えなければならぬ。小さな、メダカ類似の魚をすべて「メダカ」（以下、片仮名がきは、原則として俚語形をあらわす）と呼ぶ地域、逆に、それらを比較的正確に区別する地域、また、その中間の地域など、日本

言語地理学における調査語彙の体系化について

全国にはいろいろの地域があるはずである。柴田は、解説の、別の個所で、次のようにも記している。

辛川の集めた資料について問題になることは、さらに、ザコ、ジャコ、ハエ、メダカ、メンパ、ウルメなどの語は、その資料の得られた土地で、メダカだけをさすのか、メダカ以外の魚をもさすのか明らかでないことである。

おそらく辛川も、調査に当たっては、注意の行き届いた質問文を用意し、絵や写真も利用したのであるう。しかし、情報の大部分が通信調査によって得られた『目高考』においては、前記柴田の指摘は当然と言わねばなるまい。

私は昭和二八〜二九年に、「じぐも（地蜘蛛）」の俚語について、全国的な通信調査を実施した<sup>③</sup>。が、情報中には、明らかに他の虫の呼び名と思われるものが混ざっていた。地蜘蛛はふつう「ジグモ」のほかに、「ツチグモ」「フクログモ」「アナグモ」などと呼ばれている。垣根や木の根元、家の土台などに沿って、五センチから一〇センチの縦に細長い袋をつくって棲み、袋の下部は土の中にもぐっている。その上端は閉じて開閉しない。当時私は、地蜘蛛の俚語約七五〇種を採集したが、その中に「トタテグモ」が数例あった。生物学上の分類では、じぐも科はとたてぐも類（垂目）に属している。しかし、一般に「トタテグモ」と呼ばれる蜘蛛の、袋状の巣の上端は、地蜘蛛と異なっていて開閉できるようになっている。「トタテグモ」と回答した被調査者が、果たして「地蜘蛛」と「戸たて蜘蛛」の生態上の違いを知って答えたものか、知らないで「地蜘蛛」をも含めてすべて「トタテグモ」と答えたのか通信調査では判然としない。同様の疑問はまた、「ジグモ」「ツチグモ」「フクログモ」「アナグモ」をはじめ、他のすべて

の俚語形を回答している場合にも当てはまるのである。即ち、「ジグモ」と回答されたものの本体が、「戸たて蜘蛛」である可能性も十分にあり得る。

方言研究者、あるいは言語地理学者は、このような俚語採集過程における誤りをつとめて無くする努力をしなければならぬ。誤った情報に基づいた研究は、採集後の処理をいくら精密に行なっても殆ど意味が無い。

もしも、私が再び「地蜘蛛」に関する俚語調査を実施するとしたら、次のような方法をとるであろう。

- 1 地中にもぐる蜘蛛類・昆虫類、および蜘蛛類に関しての、生物学上の情報をでき得る限り集める。
- 2 俚語採集は臨地調査により行ない、用いる質問文については十分に検討を加える。
- 3 誤り易い他の蜘蛛・虫との混同を避けるために、出来れば巣および蜘蛛の実物を見せる。やむを得ない場合でもカラー写真により説明する。
- 4 地蜘蛛と混同しやすい他の蜘蛛（例えば「戸たて蜘蛛」）や昆虫

（例えば「蟻地獄」）の俚語を併せて採集する。

なお、俚語体系の範疇外かも知れないが、地蜘蛛の場合は、子供たちがこの蜘蛛を掘り出す時の唱えごと、掘り出した蜘蛛をつつく時（このくもは、頭をつつくことで腹を切る）の唱えごとと同時に採集しなければならぬ。柳田国男は『蝸牛考』の「童詞と新語発生」という項で、右のような場合の子供たちの唱えごと（童詞）が、新しい語形発生に深くかかわることを説いている。

さて、その『蝸牛考』論証の素材は「かたつむり（蝸牛）」の俚語

である。柳田は『蝸牛考』の中で、俚語分布の法則の一つ「方言圏論」を提唱した。わが国において、「蝸牛」の俚語は、長い期間、文化・政治の中心であった京都を真中にして、同心円をえがいて分布しているという。即ち、俚語は、文化・政治の中心地から、時代順に次々と放射され、そこを中心として同心円状に分布している。したがって、同心円の最も外側に分布する俚語は、中心地における最も古い語形であったと考える。柳田は『蝸牛考』においてそのように推定した。その最も外側にあるとされる「蝸牛」の俚語は「ナメクジ」である。「蛞蝓と蝸牛」の項に柳田は次のように記している。

蝸牛の方言の新たに発達している土地の人には、是はあるいは意外な事実かも知れぬが、蛞蝓と蝸牛とが名を一つにしていることは、決して珍しい例でも何でもないのである。まず九州では肥前・肥後・筑後の各地、壱岐の島にも蝸牛のナメクジがあり、日向の島野浦では双方ともナメクジである。（中略）国の他の一端にも同様の例がある。たとえば青森県でも津軽を始めとして、蛞蝓二つながらナメクジリという名を持つ土地が広い。（中略）同じ一致はまたちょうど、津軽と島原との中程にも見出される。たとえば飛騨の北部においては蝸牛・蛞蝓ともにナメクジリ、またはナメクジラであり、中国では安芸の安佐郡北部なども、二つともナマイクジリである。云々

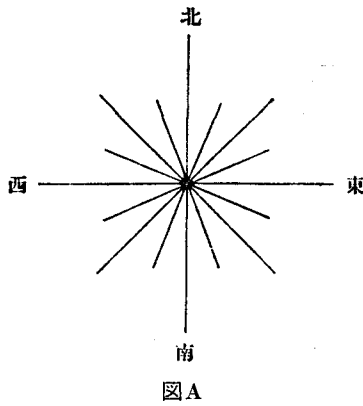
柳田が唱えた斬新な学説「方言圏論」の最も有力なよりどころは、この、ほぼ国の両端に分布する「ナメクジ」系俚語にあったであろうと推測する。私は柳田が、大正末から昭和のごく初期にかけて、どのような方法で蝸牛の俚語を収集したか詳かでないが、右に引用した『蝸牛考』の記述をみても、「蝸牛」と併せて「蛞蝓」の俚語も収集

したのであることは想像できる。  
同書には同じ「ナメクジ」系の俚語ながら、日本各地において「蝸牛」と「蛞蝓」を区別している例も報告されている。その主なものを整理してみると次のようになる。

(蝸牛)		
ツウノアルナメクヂ	ナメクヂ	肥前諫早
ツウナメクヂ	ナメクヂ	肥後玉名
ナメクヂ	ハダカナメクヂ	肥後宇土・八代・球磨
ナメクジリ	ナメクヂ	北秋田比内
カイナメラ	ナメランジ	伊豆神津島
マメクジ	メメクヂ	三河南設楽・尾張東春日井
マメクジ	ナメクヂ	不詳

柳田は、これらを「分化の法則」に従って、追い追ひその別を設けようとした結果と説明するが、ここには、県や郡、あるいはもっと狭い範囲での語彙体系をみることもできるのである。

強弱、季節、記入。図ノ下ノ方言ノ方位ノ等モ記入ノコト



『増補風位考資料』<sup>(5)</sup>には日本各地における風向きの呼び名を集めてある。その土地に影響を与える山地・海・湖・平野などの位置によって、風位名の組み合わせは多様である。また、農民と漁民との

言語地理学における調査語彙の体系化について

風に対する反応は異なっており、当然、両者の風位に関する語彙体系も異なっていると考えなければならぬ。この点において、『方言採集簿』および『方言採集手帖』<sup>(7)</sup>が、風位に関しては、いずれも東風・西風・南風・北風・東北風・西北風・東南風・西南風の八方向に限って、それに当たる俚語形を求めているのにくらべ、『簡約方言手帖』<sup>(8)</sup>の、図Aの方法はすぐれている。前記八方向のいずれでもない、その地域特有の風位名がこの方法によって採集される可能性がある。

二一

『日本語地図』の作成は、国立国語研究所の行なった事業の中でも特筆すべきものであるが、二百数十にわたる調査項目の選定にあたっては「語の変遷がかならずしも個別的でなく、関連する他の語と相関的に変化する面がありはしないかと考えて、単語のセットをいくつか加えた……<sup>(9)</sup>」としている。『LAJ』三〇〇枚の言語地図から、単語のセットに当たると思われる主なものは次の通りである。

- A 「大きい」「太い」「あらい(粗い)」
- B 「小さい」「細い」「こまかい」
- C 「おんぶする(幼児を負う)」「しょう(包を背負う)」「かつぐ(材木を担う)」「かつぐ(天秤棒を担ぐ)」「かつぐ(二人で担ぐ)」
- D 「こおる(水が凍る)」「こおる(手拭が凍る)」
- E 「おやゆび(親指)」「ひとさしゆび(人差し指)」「なかゆび(中指)」「くすりゆび(薬指)」「こゆび(小指)」
- F 「あざ(痣)」「ほくろ(黒子)」「小さいもの」「ほくろ(黒子)」「大きいもの」

G 「もみがら(粃殻)」「ぬか(糠)」

H 「じゃがいも(馬鈴薯)」「さつまいも(甘藷)」「さといも(里芋)」

I 「さきおととい(一昨日)」「おととい(一昨日)」「きのう(昨日)」「きょう(今日)」「あした(明日)」「あさって(明後日)」「しあさって(明後日)」「やなあさって(明明後日)」

以上のほかにも単語のセットを考慮したと思われる組合わせは一〇例以上みられる。また味覚用語に関する語彙の体系についてはここでは省略する。

しかし、このように十分に検討され、予備調査を経て選定された各項目であるが、実際に研究所が全国的な調査を実施してみると、幾多の問題点が生じた。以下、その主なものについて述べる。「I」内の数字は、『L A J』における言語地図の番号である。また質問文は、回答の質を均一にするために統一して用いられたものを示してある。

【一八九】 質問文「このあたりで普通「いも」と言ったらどの芋のことを言うのですか。芋が食べたいと言ったらどの芋のことですか。じゃがいも さといも さつまいも」

この場合の回答には二つの大きな流れがある。一つはその地方で最も多く栽培している「いも」を答えたもの。もう一つは渡来農産物としての「さつまいも」「じゃがいも」が入る以前の「いも」の俚語を答えたものである。卒業論文作成のために、千葉県北部野田市周辺において、これと同じ方法で、あいついで調査した増田(旧姓榊原)美智子・磯崎富美代は、その地域を、ほぼ東西によこぎる線を境界として、北側に「サトイモ」、南側に「サツマイモ」と回答する人の多かったことを報告している。<sup>(10)</sup> 磯崎はこの分布について「かつて、芋とい

えばサト芋を意味していた地域に、新しくサツマ芋を意味するものが侵入してきたと思われ、言葉の伝播は南から北へなされたと考ええる。」と解釈している。栽培する芋が「さといも」から「さつまいも」にかわったということだけでなく、「サツマイモ」という語形が強力に東京方面から伝播したと考えた。もともと、分類学上は、全く種類の異なる植物を、同じ「いも」の範疇に入れた日本人の考え方にも興味を持つるが、新しく農産物として渡来したものが加わるたびに、「いも」の語彙体系が変化してゆくありさまは極めて面白い。なお、『L A J 解説』にも記されているが、日本古来の芋として、「里芋」のほかに「山芋」も選択肢に加えておけば回答は多少違って来たであろう。また、磯崎の報告に、「収穫時期によって意味する芋が異なる」という回答も得たとある。考え得ることであり、季節に影響される事物の体系をえがく際、考慮しなければならないことである。

【二二七】 質問文「手の指や足の指などが、冬寒さのために赤くはれてかゆくなったり、ひどくなるかかたりするものがありますか。」「そんなときどうなった、何ができたと言いますか。」「

この共通語形は「シモヤケ(凍傷)」である。ところが、言語地図を見ると、日本海側および東北地方の、いわゆる豪雪地帯には「ユキヤケ」系の俚語が広く分布している。柴田武は文献により、国の中央における「しもやけ」の語史を次の如く推定する。<sup>(11)</sup>

シモクチ↓シモバレ  
ユキヤケ↓シモヤケ

しかし、地域によっては、「ユキヤケ」と「シモヤケ」とは併用され、豪雪地帯では、「しもやけ」のひどくなったものが「ゆきやけ」であるとする地域もある。また、東京語をはじめ共通語形では、「ゆきや

け」を、スキーなどで紫外線のために皮膚が黒くなることとしてい  
る。『LAJ』では、この意味の「ゆきやけ」に当たる俚語を採集し  
ていないが、霜やけに関する語彙の属する体系の中に、今後は加えて  
調査する必要がある。

最近特に、語彙の歴史の変遷と地理的分布との関連を考える研究が  
盛んであるが、語彙体系を組み立てる際には、共時的な関連ととも  
に、通時的な要素も加味しなければならない。

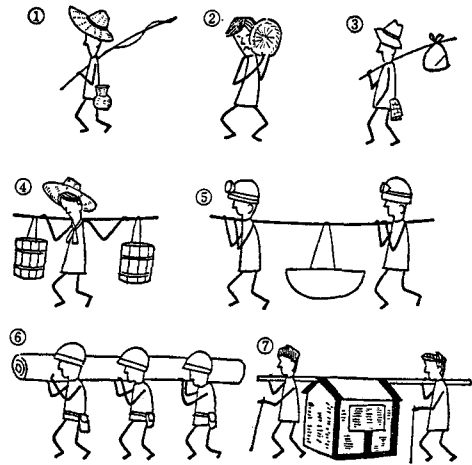
【二一〇】質問文「これを何と言いますか。(自分の目を指さす)  
この、物を見るものです。」調査時の注意として、「眼球にあたる形  
はとらない。『目が見えない』の目。」と書き添えられている。

もちろん、この共通語形は「メ(目)」である。『LAJ解説』には「こ  
れで成功したかどうかは疑問である。」と書かれている。「目」に関し  
ては語史的にみても、古くから「メ」と「マナコ」とが殆ど同義に用  
いられている。「マナコ」は眼球の意味にも用いられているが、目全  
体の意味でも用いられる。今日でも「まなこ」は「目」の雅語的表現  
として使われている。『LAJ』に示された分布も、共通語形の「メ」  
に対して、「マナコ」「マナグ」系俚語の極めて多いことを示してい  
る。「目」の俚語採集に当たっては、①物を見る器官としての目。②  
眼球。③ひとみ。に分けて行なうのが良いであろう。

体系をしっかりと作りあげて調査しなければならないものに、いわ  
ゆる運搬語彙がある。この項のはじめに、『LAJ』があつかった運  
搬語彙を、(C)に挙げておいた。『LAJ』では、片方の肩に袋をかけ  
てかつぐことの俚語も調査しようであるが(『方法』に付図が示さ  
れている)言語地図としては発表されていない。

最近、久野真・久野マリ子は、兵庫県加西市での「担ぎ方」につい

言語地理学における調査語彙の体系化について



図B

ての調査を発表し  
た。論文によれ  
ば、この地域には、  
共通語の「かつぐ」  
にびったり該当す  
る言い方はないと  
いう。担ぎ方は図  
Bの通りで、担ぐ  
対象は次の通りで  
ある。①釣竿、②  
俵、③棒の先に結  
びつけた風呂敷包  
み、④肥桶、⑤も  
っこ、⑥材木、⑦

かご(駕籠)〔図Bは両氏の論文より〕

この調査の結果、老年層では

- ①カタゲル      ②カツグ      ③カタゲル      ④イナウ
- ⑤サツシャウ    ⑥カク      ⑦カク

のような回答を得ている。運搬語彙は、個々の俚語が地域によって異  
なる一方、語彙体系の組み立てが地域によって著しく違っている。『L  
AJ』にとりあげた運搬法、久野があつかった運搬法(一部は『LA  
J』と重複している)のほかにも体系内に組み込まなければならぬ  
ものは相当あるはずである。例えば「みこしをかつぐ」「リュックサ  
ックをせおう」「荷物を前後にふりわけにする」「二人が向きあって机  
などを運ぶ」「二人が同じ方向にむいて机などを運ぶ」等々。地方に

よっては「頭」を用いる頭上運搬もある。このように「手」「腕」「頭」「背」など身体部位を用いる方法のほか、各種の道具を用いる方法もある。

運搬語彙を体系化する試みは一〇年以上前から行われている。いわば、体系化の比較的研究されている部分と言えよう。

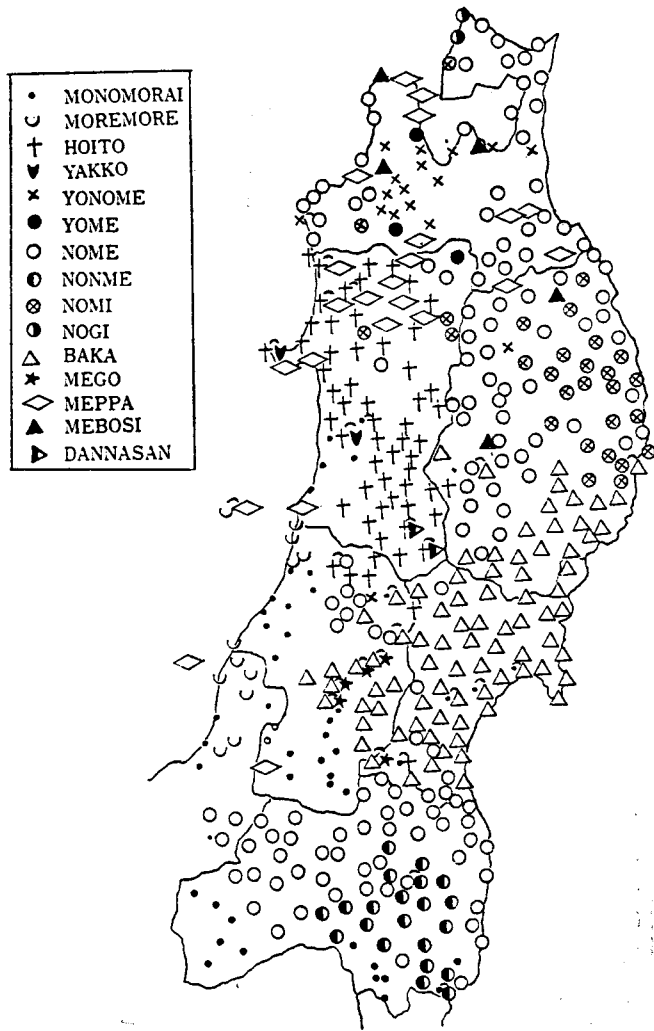
【一一二】質問文「まぶたのへりにぶつとできる小さなできものです。何と言いますか。うみを持って赤くはれると、むずむずしてかゆいのですが、間もなく直ります。」(この質問文



図C

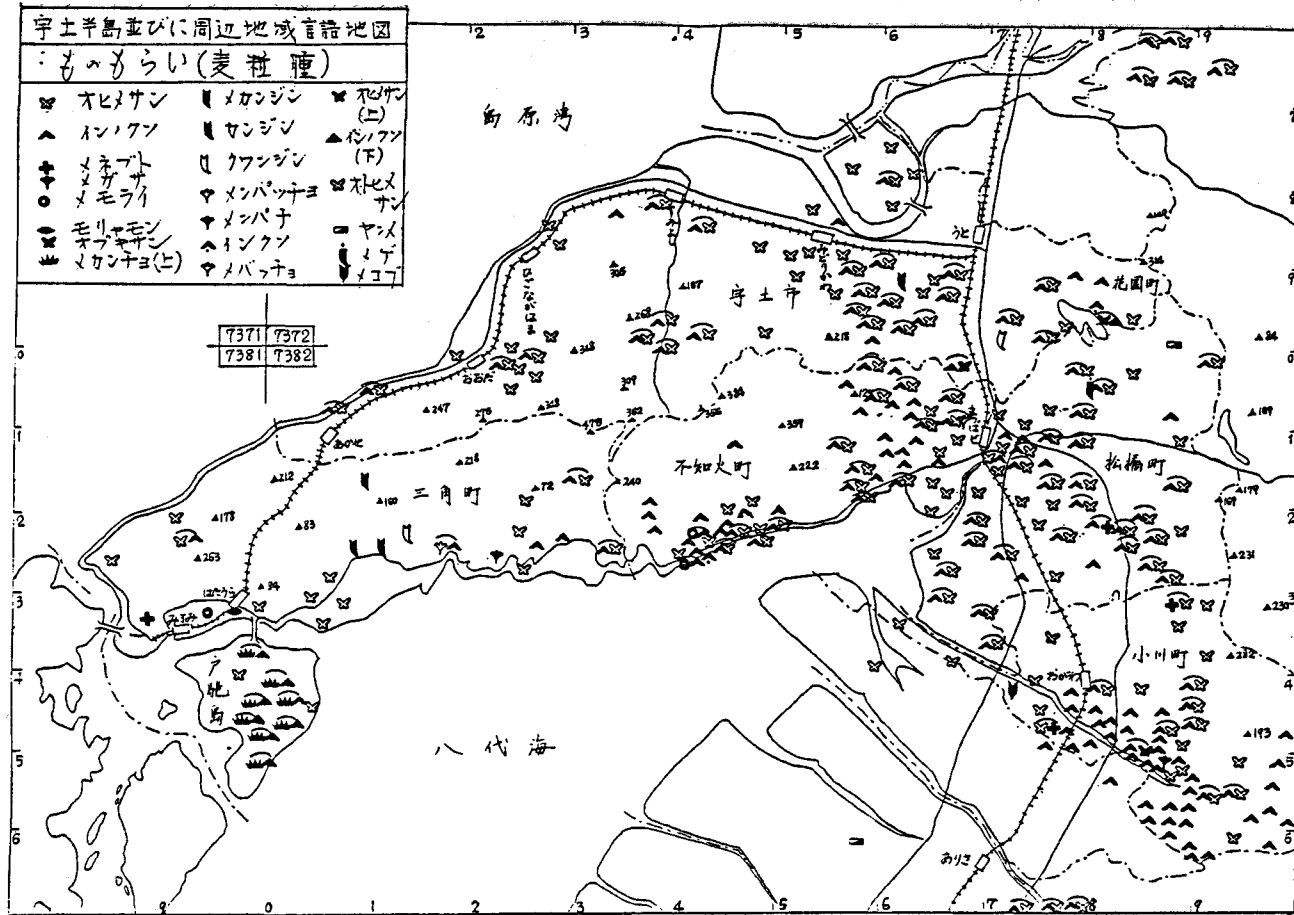
には、図Cに示した絵がそえられている) 共通語形は「モノモライ(麦粒腫)」である。調査者への注意として、「類似のできもの・眼病とまちがえないように」とある。

しかし、私は「ものもらい(麦粒腫)」の場合、他の眼病とまちがえる問題よりも、「麦粒腫」ができたところが、上まぶたか下まぶたかを区別することの方が重要であったと考える。『LAJ解説』に、秋田県南部の「ダンナサン」が、(上まぶたにできたもの)と調査担当者が注記し、下まぶたのものは「ホイト」で、その周辺と同じであることが述べられている。図Dは、『LAJ』の「ものもらい(麦粒腫)」



図D

【一一二図】のうち、東北六県分を長尾が一色刷り用に略図化したものである。秋田県南部に二カ所、右に述べた例がみえる。『LAJ』で、「」は併用していることを示す記号であるが、この場合は併用ではない。『LAJ解説』には説明されていないが、山形県中部の「メゴ」と「バカ」も、実は併用ではなく、秋田県南部の場合と同様である。私は以前に、この地域を臨地調査し、上まぶたのものが「バカ」、下まぶたのものが「メゴ」あるいは「ノメ」であることを確認して



(日本大学通信教育部国文学科学生 一森綾子 調査・作図)

言語地理学における調査語彙の体系化について



どと言いますが、そんな言い方で言うとは塩は……」

共通語形「シオカライ」

【四〇】 質問文「唐辛子の味はどんなだと言いますか」

共通語形「カライ」

【四一】 質問文「梅干しの味はどんなだと言いますか」(注梅干が不  
適当なら青いみかんなどとさしかえてもよい。

共通語形「スッパイ」

【二九】 質問文「味のいい食べものを食べて、『ああオイシイ』  
と言いますか。『ああウマイ』と言いますか。それとも別の言い方  
をしますか」

共通語形「オイシイ」

右のうち「おいしい」は、「甘い」の調査後、調査項目に加えられて  
いる。また、実際に地方調査員が面接して調査したときの、質問順は  
次の通りである。

「しおからい」↓「辛い」↓「へ塩味がへうすい」↓「甘い」↓「酸  
っぱい」(以上、『第二調査票』) 「おいしい」(『第三調査票』)

ところで、今まで述べてきた調査語彙の体系化を、極める必要とす  
るのは、これら味覚用語である。言語地理学の方法の重要な部分を、  
語彙の歴史の変遷の把握ということが占めているが、過去に用いられ  
た味覚用語の内容を正しく知ることは大変困難である。例えば「あま  
い(甘い)」の場合、現代の砂糖やあめの甘味と、古代のあまずら(甘  
葛)や干柿の甘味とは異なるであろう。「すっぱい(酸っぱい)」は最  
も把握がむずかしく、前掲の質問文では、現在の俚語においても不統  
一が起きるのではないだろうか。『L A J』の「酸っぱい」の言語地  
図に「カライ」という用例が相当みられるが、果たして、その地点で

言語地理学における調査語彙の体系化について

酸味を「カライ」と表現するのだろうかとの疑問が持たれる。さら  
に、酸味を持つものの代表である「酢」については、再度にわたり述  
べたが、古代の酢が、果たしてどのような味であったか、推定は困難  
である。『和名類聚抄』の「酢」の項には次の記載がある。

陶隱居曰俗呼為苦酒。今案鄙語謂酢為加良佐介此類也。

すなわち、「酢」は中古において、「苦酒」とも「加良佐介(カラサ  
ケ)」とも呼ばれていたのである。また、同じ『和名類聚抄』の「茄  
子」の項に、「なす」の味を説明して

酢味也。俗云惠久之。

とある。酢味は「惠久之(エクシ)」と言われていたのであろうか。

次に、『L A J』には、「にがい(苦い)」が調査項目に入っていない。  
苦味に関する俚語は、従来の方言集においても、さほど異なる語  
形が見られないことは事実である。しかし、前述の、「酢」を俗に「苦  
酒」と呼んでいた例もあることから、今後は味覚用語の体系をかたち  
づくる重要な語として、「にがい」も調査項目に入れなければならない  
い。ただし、「苦み」をきく質問文をどのように書くかは、十分に検  
討する必要がある。この点は、二・三の「国語辞典」の「にがい」の  
語釈が参考になる。

私は味覚用語を調査するに当たり、古来、中国およびわが国で言わ  
れてきた、「五味」という考えを導入してきた。しかし、本草学を中  
心に用いられている「五味(酸苦甘辛鹹)」が、実際の味覚としての  
酸味・苦味・甘味・辛味・鹹味に該当するものであるかどうかは疑わ  
しいように思われる。また、後に「六味」「八味」という語が江戸期  
の辞書に記載されるが、いずれも中国の仏書に基づいたものようで  
あり、江戸時代の民衆の味覚をあらわしたものでないことは、ほぼ明

らかである。

物語・随筆・日記などの文学作品をはじめ、古文獻の中に用いられた、個々の味覚用語を博搜する努力ももとよりなされねばならないが、その語が実際にどのような味であるかを確かめることは単独で用いられた場合は困難なことが多い。加工された食品の味は、前記「酢」の例のようにまちまちである。果実・農産物に関する味覚表現は有力な情報となり得るが、これも古代におけるそれらの味が、現代のものと同じであったかは疑問である。

今後の調査に際しては、前に述べた「渋味」・「まずい」のほかに「味無し」なども加え、また、パーソナリティやフィーリングを表現する際に用いられた従来の味覚用語（甘い考え、苦い経験、酸いも甘いも、辛き目にあうなど）の例も参考としつつ味覚用語の体系を考える必要がある。

以上、言語調査における語彙の体系化について、従来の研究にややもすれば欠けていた点を指摘し、味覚用語研究にいかにとり入れるべきかを述べた。

注(1) 柴田武「方言研究の現状」(『日本語学』一九八四年一月号)

(2) 長尾勇「五味考―味覚用語の変遷と分布―」(『語文』昭和五十七年七月・第五五輯)

長尾勇「味覚用語の変遷と分布」(『言語生活』一九八三年一〇月号)

(3) 長尾勇「蜘蛛考」(『国語学』一九五四年二月・第一九輯)

(4) 柳田国男「蝸牛考」(昭和五年・刀江書院、昭和一八年・創元選書、昭和五五年・岩波文庫)

(5) 柳田国男編『増補風位考資料』(昭和一七年・明世堂)

(6) 文部省・国語調査委員会編纂『方言採集簿』(明治三十七年・日本書籍株式会社)

(7) 東條操編『方言採集手帖』(昭和三年・郷土研究社)

(8) 東條操編『簡約方言手帖』(昭和六年・郷土研究社)

(9) 国立国語研究所『日本語地図解説』―方法―(一六―)

(10) 磯崎富美代「千葉県北部およびその周辺における語彙の分布について」(『語文』昭和五十七年七月・第五十五輯)

(11) 柴田武「単語の全国分布」(『人類科学』一九七三年・第一五集)

(12) 久野真・久野マリ子「方言語彙の体系的記述」(『新しい方言研究』、『国文学解釈と鑑賞』昭和五九年五月号)

(13) 長尾勇「ものもらい考」(『日本大学農獣医学部一般教養研究紀要』昭和四五年・第六号)